

首里城跡木曳門地区出土の土師器と思われる土器皿

Possible 'Haji Ware' Found in Kobiki-mon Sector in Shuri Castle Site

瀬戸 哲也
SETO tesuya

ABSTRACT: This paper reports and analyzes an earthenware dish excavated in Kobiki-mon sector in the Shuri Castle Site. The dish resembles to the Early-Modern pottery of Okinawa; however, its form, retouching technique and temper indicate different features. The pottery of the closest kind seems to be the Haji ware of southern Kyushu, produced in 16th and 17th centuries. Although they look alike, the observed temper still shows a different quality. At any rate, the specimen may represent a relationship between Okinawa and southern Kyushu in the period.

1. はじめに

筆者は、沖縄で出土している本土産と思われる瓦質土器の集成・検討以来、日本本土からもたらされた土器・陶磁器類でも特に僅少なものに興味がある（瀬戸2004 a・b）。この瓦質土器は、主に北部九州産の15~16世紀と考えられる浅鉢・風炉で、首里城跡・勝連城跡・今帰仁城跡・天界寺跡などの主にグスクや寺院跡で出土している。

今回は、1989~1990年度にわたって沖縄県教育委員会が行った首里城跡木曳門地区において出土している特殊な土器皿について検討したい。この土器皿は、近世以降に壺屋窯で焼かれた素焼きの器である陶質土器に一見似ているが、その器面の滑らかさ、強い回転調整、糸切底などから、異質な感じを受けるものである。既に、この資料については、以前報告書掲載資料（沖縄埋文2001）を用いて若干の検討を行ったことがある（新垣・瀬戸2004）。この前稿では、この土器皿を16~17世紀代の鹿児島を中心とする南九州産の土師皿ではないかと推察した。

しかしながら、この検討に用いた報告書資料では、特徴の一つである糸切底の拓本が掲載されていないこと、さらに未掲載の資料によりその特徴が窺えるものがあることが確認できた。そのため、報告書掲載以外の未掲載資料の内12点を実測・観察することで、前回検討したことについて再度確認することを本稿の目的とする。さらに、鹿児島地域の資料を実見することで比較検討も行った。

2. 首里城跡木曳門地区の概要

今回、対象とする土器皿が出土した首里城跡木曳門地区について、調査報告書によりその概要を略述する（沖縄埋文2001）。

木曳門は城内へ導く西方に位置する門の一つであるが、城内工事等の資材搬入口とされており、普段は石で封じられていた。この地区の調査は、儀礼の場所である御庭の前面広場の下之御庭、ここに位置する用物座、木曳門と同様に城外から至るこの広場へ瑞泉門・漏刻門・廣福門と一連で行っている。

この調査では、木曳門の基礎である石積遺構を一部確認することができている。今回の土器皿も含め全ての遺物はこの遺構を覆う近世~現代の遺物が混在する攪乱層から出土している。そのため、層位等から時期的なまとまりを絞ることは困難である。出土陶磁器の内容であるが、周辺の地区と変わ

らないもので、青磁・白磁・褐釉を中心とした中国産を中心とした陶磁器および、近世以降の沖縄産各種陶器、本土産陶磁器で構成される。つまり、今回検討する土器皿はこういった状況から出土しているため、他の遺物との共伴関係により、時期を限定するのは難しいと言える。

後述するが、報告書においても認識されているように、本土産と考えられている焙烙も、木曳門地区及び隣接する下之御庭地区で出土している。このことは、この土器皿が首里城跡の他地区でも出土していないことも合わせ、やや特殊な状況での出土と言えよう。

3. 土器皿の観察（図1・写真1・表1）

今回取り上げる土器皿であるが、木曳門地区で、接合後の破片数で111点出土している。既に報告書では13点が掲載されているが、この時には出土点数は記されていなかった。また、先述したようにこの土器皿について、口縁部が多く実測されているが、特徴的な糸切痕等の調整が見られる底部についてはあまり掲載されていない。そこで、今回は未掲載分の中でも特徴的な12点を実測・写真撮影を行なうこととした。

以下、主に今回掲載分の12点についての観察をまとめていくが、基本的に既報告のものも同様の特徴である。

全体的な特徴を述べていく。底部は、全体的に平底で、わずかに上げ底となるものが多い。体部は

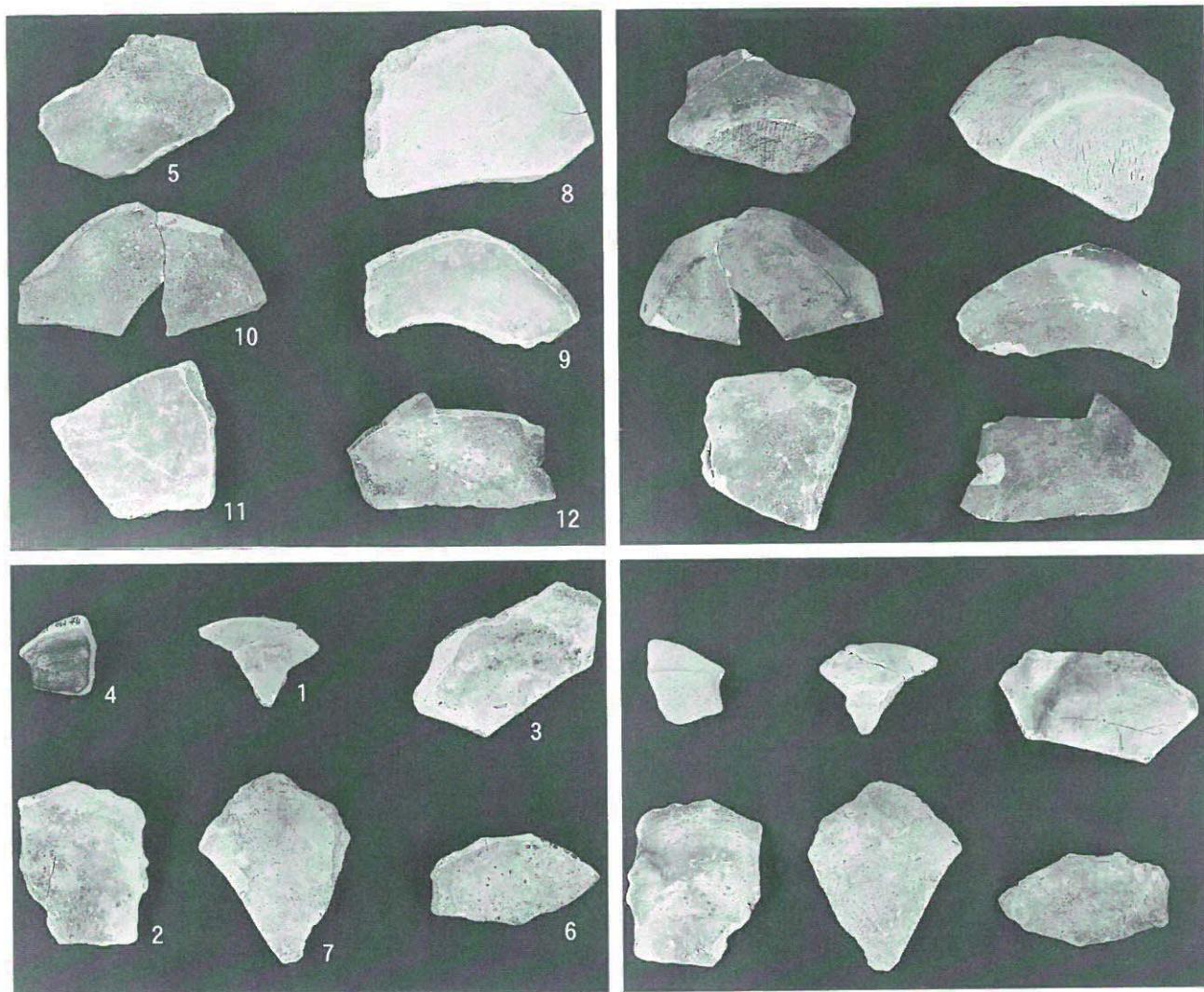
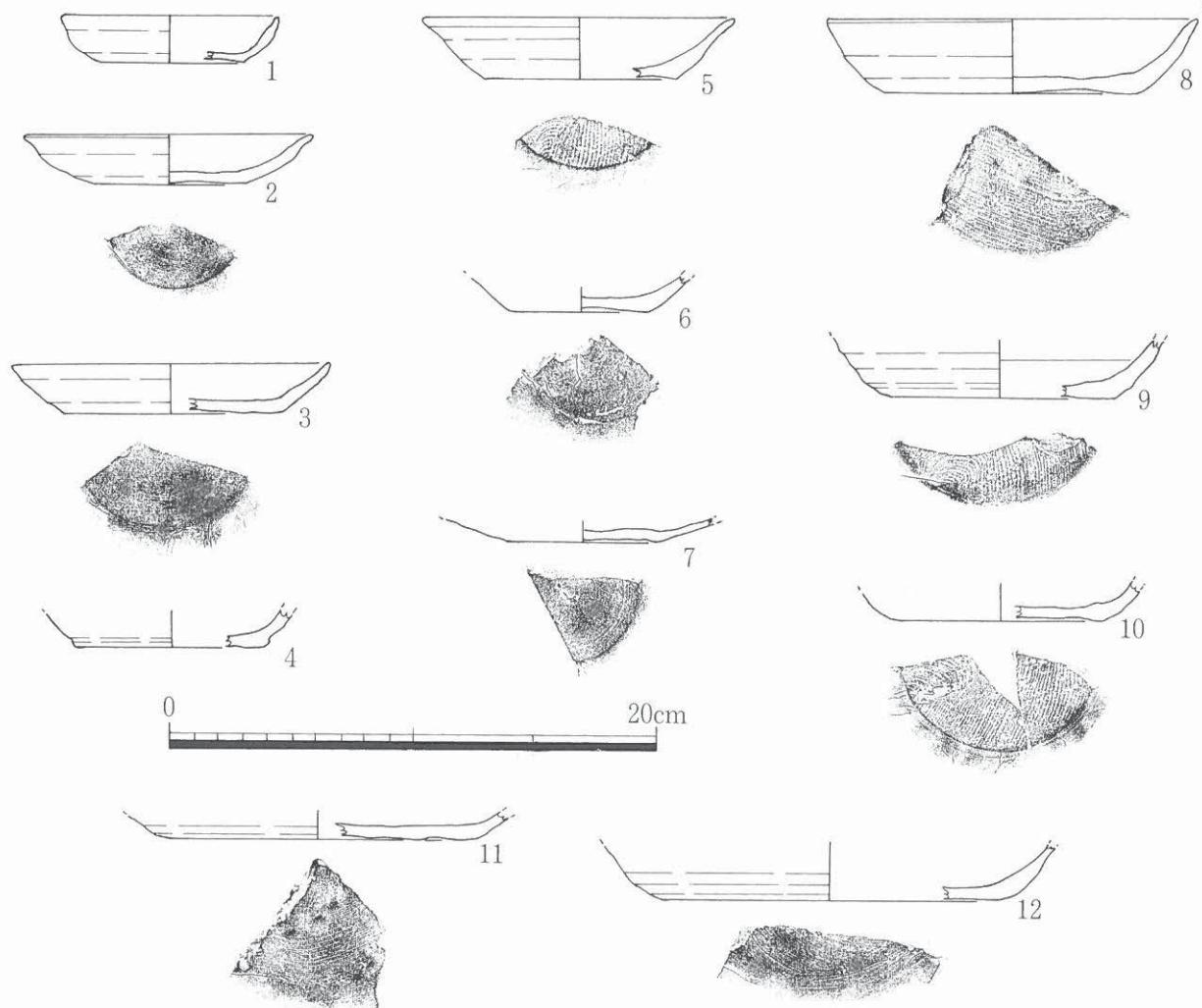


写真1 首里城跡木曳門地区出土土器皿（左：内面 右：外面）



第1図 首里城跡木曳門地区出土土器皿

第1表 首里城跡木曳門地区出土土器皿観察表

番号	口径	器高	底径	色調	特徴
1	8.8	1.9	6.0	内外5YR7/8橙	底部不定方向のナデか。体部内外面ヨコナデ、内面に線状痕見られる。
2	11.8	2.0	6.2	内10YR8/3浅黄橙、外10YR6/2灰黄褐	底部回転ナデ。体部内外面ヨコナデ、共に線状痕顯著。口縁外面やや黒変。外面底部との境は不明瞭。
3	13.0	2.0	8.0	内外10YR8/3浅黄橙	底部回転ナデ消しか。体部内外面ヨコナデ。外底、内面線状痕顯著。体部縁外面やや黒変。
4	-	-	7.6	内10YR3/2灰褐、外7.5YR8/4浅黄橙	底部不定方向のナデ?。体部外面下半に強い段がある、回転ケズリか? 体部内面ヨコナデ、線状痕顯著、焼成不良のためか黒変。他に比べるとわずかであるが砂礫混、やや軟質。
5	12.8	2.5	8.0	内5YR8/4浅橙、外10YR8/4浅黄橙	底部目が粗い糸切痕。体部外面下半はケズリもしくはヘラナデ、上半・内面強いヨコナデ、線状痕顯著。ヨコナデのため、体部わずか外反。外面上半一部黒変。
6	-	-	5.6	内外7.5YR8/4浅黄橙	底部回転ナデ消し、やや上げ底。体部内外面ヨコナデ、線状痕目立たない。全体的に灰がかっており、被熱か?
7	-	-	6.0	内外2.5Y7/1灰白	底部回転ナデ消し、線状痕顯著、やや上げ底。体部内外面ヨコナデ、線状痕あり。
8	15.0	3.0	10.4	内10YR8/3浅黄橙、外7.5YR8/8黄橙	底部目が粗い糸切痕。体部外面ヘラナデ?、内面ヨコナデ、共に線状痕顯著。
9	-	-	9.4	内7.5YR8/3浅黄橙、外5YR8/4淡橙	底部目が粗い糸切痕。体部外面ヘラナデ?、内面ヨコナデ、共に線状痕顯著。
10	-	-	8.4	内10YR8/4浅黄橙、外2.5Y6/2灰黄	底部目が粗い糸切痕。体部外面ヘラナデ?、内面ヨコナデ、共に線状痕顯著。内面ざらつき、被熱のためか?
11	-	-	12.4	内2.5Y7/1灰白、外2.5Y8/2灰白	底部目が細かい糸切痕。体部内外面ヨコナデ、線状痕顯著。
12	-	-	13.4	内10YR8/4浅黄橙、外10YR5/2灰黄褐	底部目が細かい糸切痕。体部外面は滑らかでヘラナデもしくはミガキか。内面ヨコナデ、線状痕顯著。内面ややざらつく。

底部との境が比較的明瞭なものが多いが、2・12などはやや不明瞭である。口縁部が残存しているもので見ると、体部は底部から直線的に伸びるものである。口径は8~15cmの間のものが多い。既報告分もあわせると、13~15cmのものが多いと思われる。一方、底部で見ると、6cm、8cm、10cm、12cm台といったサイズに分けることが出来ようか。口縁まで窺えるものがそれほど多くないため、サイズごとの器形の違いは明確にすることは難しい。いずれにせよ、サイズの作り分けがなされているのだろう。

調整であるが、基本的には回転を利用したもので、手づくねではない。内面は滑らかで、同心円状の線状痕が明瞭に残るものが多く、ヨコナデと思われる。外面であるが、特に胴部下半に緩やかな稜が残り、さらに細い沈線状になった痕（以下、線状痕と呼称）が途切れ途切れではあるが見られる。この痕跡はいわゆる回転ケズリとも言えるが、通常のケズリのようにその部分が明確な凹面となってはいない。そこで、この痕跡はヘラ状の工具で回転を利用したナデではないかと考えた。底部も回転を利用した調整であり、糸切痕を残すもの、同心円状の線状痕が見られるものの二者がある。糸切痕を残すものには、目が粗いものと細かいものがある。線状痕を残すものについてはヘラで削り取ったものか、切り離した後にヨコナデ調整を行ったのかは判断が付け難い。いずれにせよ、回転を利用した調整だと考える。

色調は、浅黄橙色のものが多いが、焼成が悪いのかもしくは二次的に火を受けたのか灰白色もしくは一部が明るく橙色になっている部分のものもある。一部、黒変しているように見えるものもあるが、例えば灯明皿として利用したかどうか断定できるほどではない。

胎土は精良で、砂礫はほとんど混じらないで、非常に緻密である。また土器にしては非常に硬くしまっている。

報告書ではこの土器皿を壺屋で焼かれた陶質土器（アカムヌー）の項で掲載されていたが、通常の陶質土器ではないという認識もなされていた。しかしながら、具体的な産地については触れられていなかった。

4. 鹿児島地域の土師器皿との比較（図2）

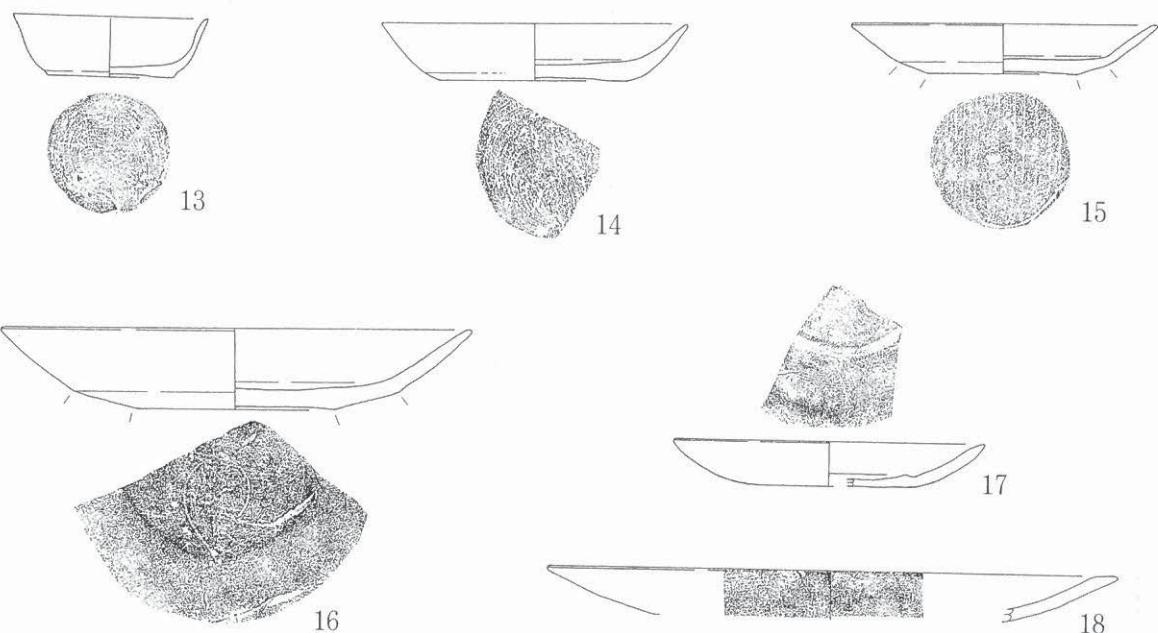
さて、このような特徴をもつ土器を九州地域に求めると、鹿児島県を中心とした南九州の16~17世紀の土師器皿に類似するようである。筆者が実見した富隈城跡、鹿児島（鶴丸）城跡、浜町遺跡のものを中心に比較していきたい。また、宮崎県都ノ城跡（都城市教委1991）でも同様の資料が出土しており、重要だが今回は実見していないため検討の対象とはしていない。

隼人町富隈城跡の土師器皿は、中国産青花などの陶磁器や文献資料により16世紀末~17世紀初頭と限定されている資料である（隼人町教委1999）。この土師器皿には、幾つかの種類がある。

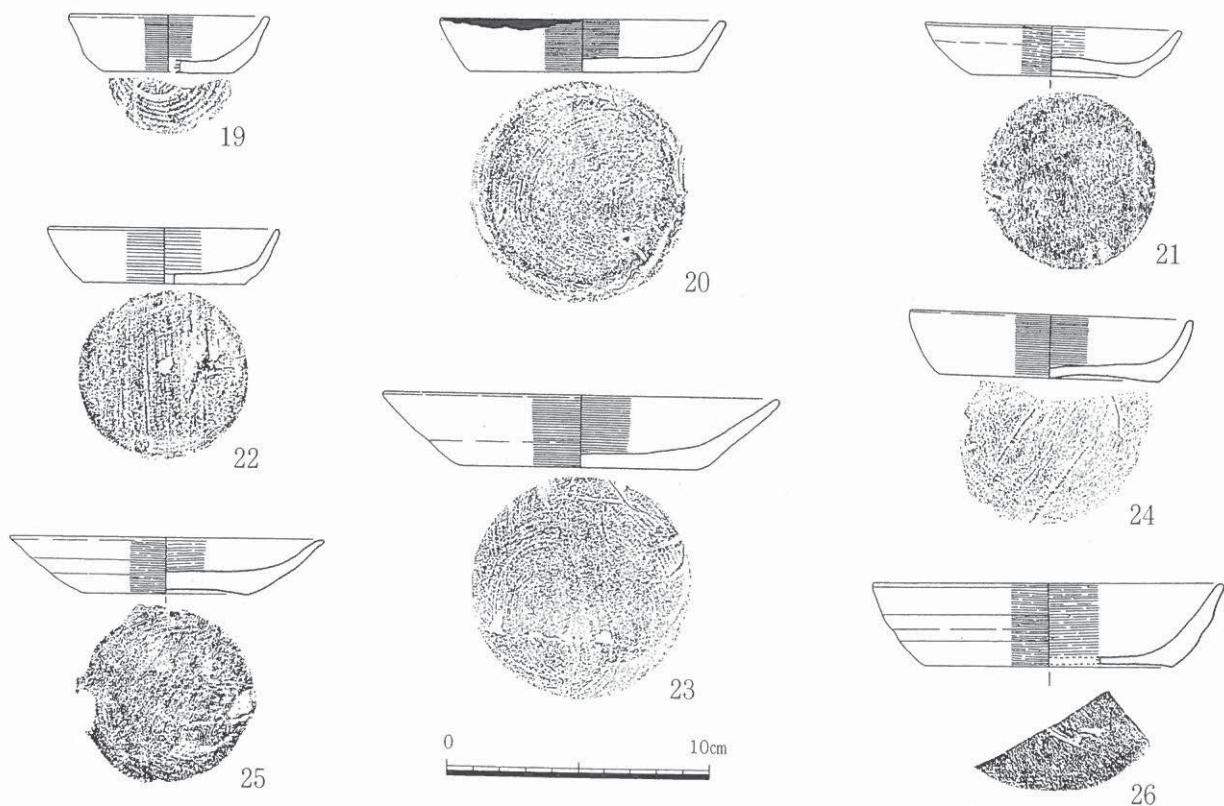
最も特徴的なものは、15・16のように、胴部下半に幅1~2cmがケズリのままで残された部分がある、いわゆる面取りされているものである。胴部が大きく外に開くのも特徴である。底部は様々で、糸切痕を残すもの、線状痕が目立つ回転ナデもしくはヘラナデ調整である。木曳門地区のものにはこの明瞭な面取りはないことと、胴部の外反度が弱いことから、やや異なるものであろう。ただ、底部に回転ナデ調整されるものがあることは共通している。

13・14はこの面取りがないものであるが、やはり胴部下半に緩やかな稜は見られる。底部は糸切底が多いようである。14については、木曳門地区の8などにやや似るようである。

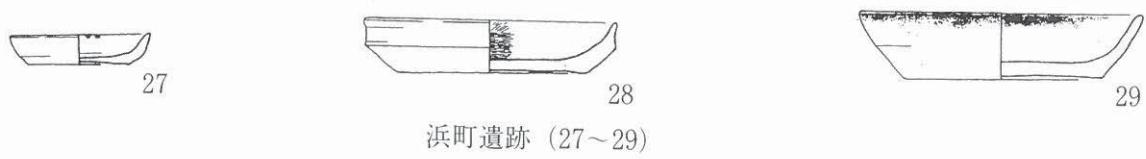
また、17・18はいわゆる京都系とされるロクロを使用しない手づくね土師器皿である。これらも時期的には、伊野の編年（伊野1987）によると16世紀後半~17世紀前半代であるので、より土師器皿全



富隈城跡 (13~18)



鹿児島城二の丸跡 (19~26)



浜町遺跡 (27~29)

第2図 鹿児島地域の土師器皿

体の年代を限定できるものと言えよう。

鹿児島（鶴丸）城跡の土師器皿は、近世・近代の遺物と共に出土しているようであるので、明確な年代は与えにくい資料であるが、16～17世紀が主体の富隈城跡よりは新しいものであろう（鹿児島県教委1983・1991・1992）。

特徴としては、19・21のように胴部下半に面取りが見られるものとないものがある。面取りが見られるものは、富隈城跡に比べると、胴部の外反度は弱い。法量は8～20cmの間で、10～14cmが多い。底部は、糸切底、ヘラナデ調整が多い。回転ナデ調整のものも見られるが、木曳門地区や富隈城跡のものと比べると、線状痕が目立たない。木曳門地区のものとは24や25が器形的には近い。

浜町遺跡の土師器皿は、主に18～19世紀代の中国産・肥前系陶磁器と共に出土しているようである。

特徴としては、やはり面取りがあるものとないものがある。ただ、両者とも先の3遺跡の資料と比べると、器壁が全体的に厚い点でまず異なる。また、面取りを有する28は口縁が直立する点でこれまでのものとは異なる。さらに、口径12cm以上のものは見られない。実見すると、この資料は木曳門地区のものとは全く別のものと思われる。

このような中で、木曳門地区資料はどのように位置付けられるであろうか。まず、富隈城跡の面取りを持つタイプ（15・16）のものではないと言える。器形的には、先述したが富隈城跡の14、鹿児島城跡の24・25が近い。ただ、底部がヘラ調整のものではない点が異なる。富隈城跡では16のように底部に線状痕が目立つ回転ナデ調整のものがあり、この点は木曳門地区資料と類似する点である。浜町遺跡のものは、全体的に厚ぼったいことから、やや異なる。

そのように考えると、富隈城跡よりも新しい傾向で、鹿児島城跡のものとほぼ同時期のものと言えようか。ただ、鹿児島城跡のものが時期的に限定できないが、浜町遺跡のものとは異なるので、おおよそ17世紀代と考えられようか。先述したように、底部の回転ナデ調整が富隈城跡のものに近いものがあるので、鹿児島城跡のものよりやや先行する可能性もある。

ただ、これら鹿児島県内の資料と全く同じと言えるかどうかであるが、木曳門地区のものは硬質で砂礫が全く混じらないのが特徴であるが、これと同一とまでは断定できなかった。

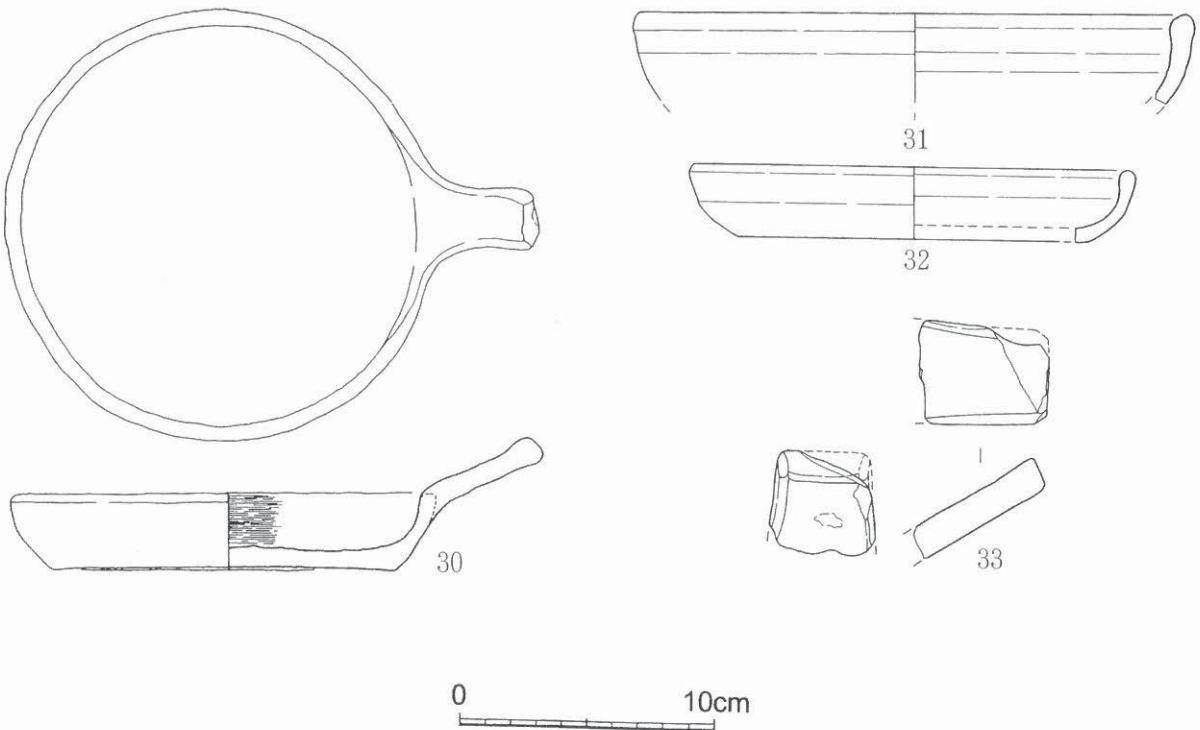
5. 焙烙について（図3）

ここで土器皿から離れて、冒頭で触れた焙烙について見てみたい。この焙烙は、土器皿と同じ首里城跡木曳門地区首里城跡木曳門地区及び隣接する下之御庭地区で出土しているものである。量的には、下之御庭地区の方がより大きな破片で多く出土している。今回掲載した図面も下之御庭地区で出土したものである。

さて、この焙烙は、身（31・32）と把手（33）が別個体で出土している。これも結論を先に述べてしまうが、鹿児島地域のものに類似するのである。例としては、報告書でも取上げているように、鹿児島県浜町遺跡（30）のものを挙げる。この焙烙も先の土師器皿と同様に18～19世紀代の陶磁器と出土している。

個々の特徴だが、土師器皿ほどは強くないヨコナデ調整によるもので、底部は平底である。口縁部が丸く肥厚するものが多い。焼成は良いが軟質で、色調は黄灰～黄橙色である。把手は3～5cm前後である。実際に浜町遺跡のものと比較したが、全く胎土まで同一化断定できないものの、器形・色調・焼成は類似していた。印象的には土師器皿よりも似ている雰囲気であった。

このように考えると、土器皿が浜町遺跡のものよりもやや古手と思われるものに似ていることから、焙烙とは直接関係しないと考えざるを得ない。新垣が指摘するように、18～19世紀の薩摩陶器は首里



第3図 鹿児島産炮烙

城でも比較的多く出土する（新垣2004）。この焙烙については、この他の薩摩陶器と同じような意味で考えたほうが良いかもしれない。

6. おわりに

以上の検討から、首里城跡木曳門地区出土の土器皿は、鹿児島県内の土師器皿に類似するものがあることは確実と言えよう。時期的にも、富隈城跡・鹿児島城跡の資料の比較から、およそ17世紀代ではないかと推察した。

しかしながら、この資料が鹿児島で作られたのかどうかは、明確に同一だという胎土などの特徴については抑えられなかった。この点では、筆者が別稿で行った瓦質土器の検討でも同様であった（瀬戸2004a・b）。それは、現状では沖縄産瓦質土器にはない菊花文の連続スタンプが施されているものでも、微妙な文様の特徴が異なっていることや、胎土が沖縄産のものに類似するように見えるものがあったことである。

この土器皿についても、前稿では鹿児島産ではないかという結論を導き出し、今回もその可能性を主張はしている。しかしながら、やはり、本土の方でも明らかに確認できない場合は、沖縄での模倣についても考える必要もあるのであろう。今回の土器皿については、首里城跡のみの出土しか認められていないこともある。いずれにせよ、やはり胎土の特定もこれからこのような製品に関しては必要であろう。

最後にこの土器皿の意義について若干考えてみたい。これまで検討してきたように、若干の疑問点はあるが、鹿児島を中心とする南九州の土師器皿に類似するものである。そこで、この土器皿は鹿児島地域の年代で考えられる17世紀だとすると、この時期に当該地域との何らかの交流が想定できるのである。前稿では、沖縄の陶器生産開始期と関連した考えを述べた（新垣・瀬戸2004）。

また、一般に土師器皿は灯明皿や何らかの儀礼に使用するものと考えられている。木曳門地区の土器皿は、全体的に変色しており被熱をした可能性があるが、明らかに灯明皿として使用されたと言える煤は見られない。ただ、この土器皿は今のところ、首里城跡でも当地区だけでの出土であるので、何らかの非日常的な儀礼等に用いられたものであろう。

いつもながら不十分ではあるが、首里城跡木曳門地区出土土器皿が、鹿児島地域のものと器形・調整の特徴が類似するものがあることを指摘した。繰り返すが、こういった他地域のものに類似する資料については、器形・調整だけではなく、何らかの形で胎土についても検討することがまさに必要であろう。

首里城跡木曳門地区の調査報告に携わった西銘 章氏には様々ご教示を戴いた。また、未報告資料の掲載にあたっては、当埋蔵文化財センターの皆様にお世話になった。

今回、報告した資料12点は、既に報告された13点（沖縄埋文2001）と共に閲覧できるように整理している。所定の手続きをとられると、閲覧が可能であるので、今後広く利用されたい。

渡辺芳郎、中村和美、重久淳一の三氏には、鹿児島県の土師器皿について多くの御教示を戴いた。新垣 力・佐藤亜聖の両氏には、この土器皿がもたらす諸問題様々な御教示・御助言を戴いた。写真現像・焼付については、光嶋香・田村浩子両氏にやっていただいた。記して感謝申し上げたい。

(せと てつや：調査課 専門員)

参考・引用文献

- 新垣 力 2004 「沖縄・首里城出土の九州陶磁」『受容層の違いによる九州陶磁の様相』九州近世陶磁学会
新垣 力・瀬戸哲也 2004 「近世初頭における沖縄への窯業技術の伝播－16世紀～17世紀頃の考古資料から－」『第5回沖縄考古学会・鹿児島県考古学会合同学会 研究発表資料集 20年の成果と今後の課題』沖縄考古学会・鹿児島県考古学会
伊野近富 1987 「からわけ考」『京都埋蔵文化財論集』
沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『首里城跡一下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡 発掘調査報告書－』
鹿児島県教育委員会 1983 『鹿児島（鶴丸）城本丸跡』
鹿児島県教育委員会 1991 『鹿児島城二之丸跡（遺構編）』
鹿児島県教育委員会 1992 『鹿児島城二之丸跡（遺物編9）』
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2000 『浜町遺跡』
瀬戸哲也 2004 a 「沖縄出土の本土系瓦質土器」『グスク文化を考える』新人物往来社
2004 b 「本土系瓦質土器の産地についての補論－北部九州のものと比較して－」『紀要沖縄埋文研究2』
沖縄県立埋蔵文化財センター
都城市教育委員会 1991 「都之城跡（主郭部）」『平成2年度遺跡発掘調査概報』
隼人町教育委員会 1999 『富隈城跡II』